窯元の認識する陶芸の里について－小石原と小鹿田の景観の比較の試み－

九州産業大学工学部　学生会員　熊谷　隼斗
九州産業大学工学部　正会員　　山下　三平

1.　序論

1－1　背景

福岡県朝倉郡東峰村の小石原と大分県日田市の小鹿田は焼物の産地として知られる陶業集落である。小石原焼は現在でも手仕事を遵守しているものの 1960 年前後から産業拡大のために近代化を受容し、作陶工程の中に機械化が数多く見受けられるようになり、産地を拡大させていった。

一方、小鹿田焼はいまも伝統的な作陶方法を遵守し、家族労働者のみの伝統的な生産体制が維持されている。

この二つの産地は違った歩みをしているが、起源は同じであるがゆえに、完成品は酷似している。しかし生業のあり方に影響される両産地の文化的景観は大きく異なる。この相違を適切に把握し、作陶の違いを検討することで、景観とその形成要件との関係が明らかになると考えられる。

1－2　目的

そこで本研究は、機械化を受容した小石原と伝統的な技法を伝承し続ける小鹿田の現在の作陶方法の違いを調べる。また、窯元らが認識する里の範囲を把握し、両産地の文化的景観の一側面として把える。そうして両産地の比較をすることで、文化的景観の形成と保全のための知見を得ることを目的とする。

2．研究方法

2－1　対象地域

東峰村で生産される小石原焼は 1682 年に始まった。小石原皿山地区を中心に主に大小の日用雑器を製造していた。かつては共同体的生産構造で、家内手工業的生産形態を長く維持してきたが、民芸運動との接触と、1950 年代から 1960 年代の民芸ブーム以降、作陶風景が変容し、里の範囲が拡大していく。

一方、小鹿田焼の里は、東峰村の隣接する大分県日田市に位置する。小鹿田焼の創始は 1702 年で、現在でも伝統的な陶業がなされており、1995 年に国の重要無形文化財に指定され、2008 年には重要文化的景観に選定された。

この二つの産地の共通点は、作品が酷似しているということと、民芸運動によりその知名度を増したということである。

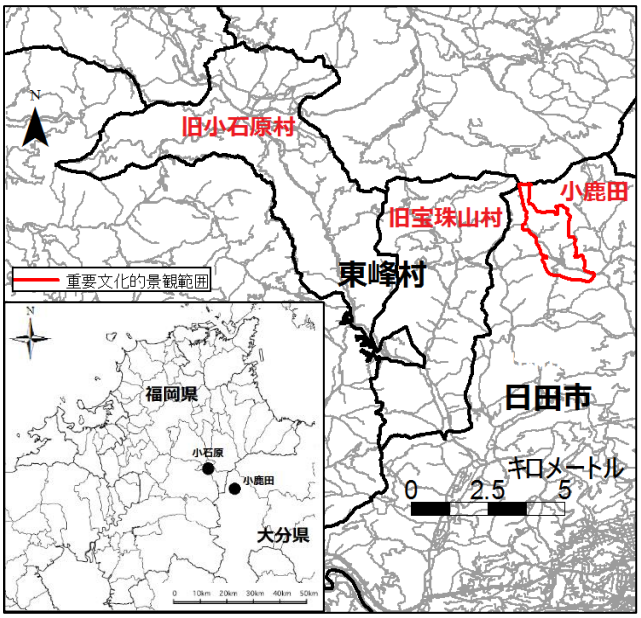

図１　対象地域(国土地理院地図をもとに作成)

2－2　調査と分析の概要

小石原は陶土協同組合加盟の 44 軒中 36 軒の窯元と、小鹿田は 10 軒すべての窯元の協力が得られた。彼らに作陶に関する詳細をヒアリングし、産地の範囲を地図に描いてもらった。調査期間と共通項目は表 1 に示す。地図は 100m 四方のメッシュで頻度を示し、両産地の比較をする。

表１　調査期間と調査項目

	小石原地区	小鹿田地区
調査年月	2012年11月～2013年1月	2015年8月
調査項目（共通）	①開窯時期	
	②土、水、木の採取場所	
	③技術の変化	
	④販売形態	
	⑤大切なところ（場所）	
	⑥産地の範囲	

3．結果と考察

3－1　両産地の現在の作陶方法の違い

表２　小鹿田地区小石原地区の作陶方法の比較

作業工程		小石原地区	小鹿田地区
土	採土	小石原陶土、天草陶土	共同の採土場（年1～2回）
	陶土作成	機械化、陶土工場から購入、水簸設備	唐臼、水簸設備を用い精製
水	取水地	井戸、水道水、川	川、井戸、湧水
焼成	窯の燃料	重油、灯油、ガス	製材所の廃材
	窯の形態	個人窯	個人窯（5基）、共同窯（1基）
成形	ろくろ	電気ろくろ、石膏型	蹴りろくろ
	装飾	飛び鉋、刷毛目、櫛目、化粧掛	飛び鉋、刷毛目、化粧掛
釉薬	原料	赤谷長石、小石原錆土、藁灰、木灰、酸化銅	赤谷長石、藁灰、木灰

両産地の作陶方法を比較すると、成形の際の装飾や釉薬の原料などが共通する。小石原の陶土は陶土工場で購入するか、機械を使って採掘した土を粉砕し、精製されている。小鹿田ではすべての窯元で伝統的な唐臼を用い粉砕した後、水簸施設で精製する。水の採取場所として小石原は川、井戸水のほかに水道水を用いている。小鹿田は自然由来である。焼成に使われる燃料は小鹿田の場合、薪材を経て今は製材所の廃材を用いている。小石原では薪材、石炭、重油の使用を経て現在はガスが主流である。

小石原は窯元の敷地内のみでの生産が可能なのに対して、小鹿田では地域の自然資源を利用し、作陶を続けている。

3－2　両産地の職人の認識する里の範囲

(1)小石原

小石原のオーバーレイ分析による里の範囲を見ると、窯元の多く集まる皿山地区周辺が 100%選ばれている(図 2)。皿山地区は小石原焼発祥の地であるためと考えられる。

60%から 80%の領域は皿山地区周辺以外の窯元をも含むように選ばれている。これは民芸ブーム以降の窯元拡散の影響を反映したものと考えられる。焼成に薪を使用しなくなった小石原は自然資源にかつてほどには依存しておらず、窯元の多く集まる場所以外は 20%と認識が薄れている。

60%以上の被験者が共通認識している領域は行政域の中に含まれているが、行政域の西側は窯元が存在していないため、ほとんど認識されていない(図 2 の赤線)。

集水域では、60%以上の被験者の認識領域に近いが、北側と東側に認識されていない部分があることが分かる(図 2 の青線)。

(2)小鹿田

一方、小鹿田では、すべての窯元に認識されている領域は窯元が多く集まる範囲と重なる。作陶を主に行う場所として 100%の窯元に認識されている。

80%の窯元に選ばれている範囲は唐臼がすべて入る領域である。採土場から運んだ土や釉薬の原料を粉砕するのに用いられ、昔ながらの作陶を行う小鹿田にとって欠かせない設備であり、焼物の里の景観を構成する要素の一つとなるため認識が高いと考えられる。

60%の窯元に選ばれている範囲は薪小屋を基準に多く選ばれている。焼成の際に製材所の廃材を乾燥させたものを使用するため、多くの窯元に認識されている。

40%未満の認識率である領域は少なく、窯元の認識している領域がほぼ同じである。重要文化的景観に選定されている範囲の北側にある池ノ鶴地区は窯業に関わる施設がないため、とくに認識されていない。窯元にとっては、池ノ鶴は別地区として認識されていると考えられる。

重要文化的景観に選定されている範囲に 80%以上の共通認識領域は含まれている。しかし、40 - 60%の認識領域は西側に大きくはみ出している。この領域には薪小屋があるため重要である。

(3)規模

両産地の認識領域を比較すると、小石原は 3,513ha で小鹿田は 159ha であり、その範囲に大きな差がある。小石原は作業の中に機械化を取り入れ、その窯元のみでの生産が可能になり、窯元同士が離れて存在することが可能となったため産地を拡大した。一方、小鹿田焼では共同窯、唐臼、採土場などの施設が生業には欠かせないため窯元が比較的狭い領域に集中する。

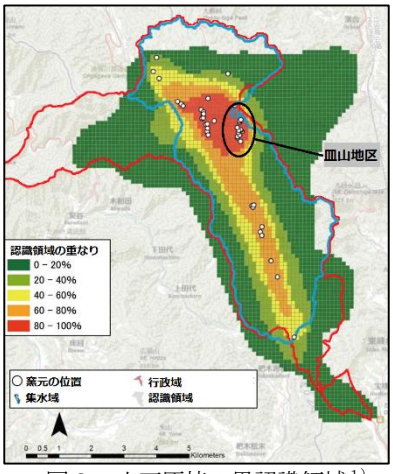

図２　小石原焼の里認識領域[1)]

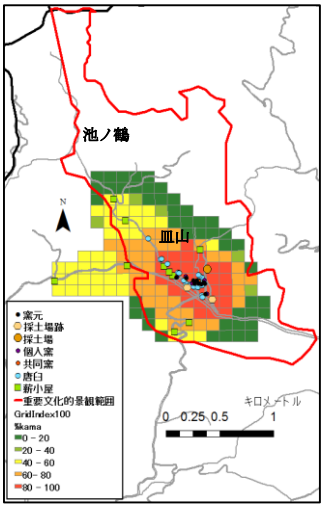

図３　小鹿田焼の里認識領域

4．まとめ

本研究では小石原焼の里と小鹿田焼の里の現在における作陶方法の違いと、窯元らの認識する焼物の里の領域を把握した。その成果を示せば以下のとおりである。

1) 作陶方法の違いが里の認識領域に大きく影響する。
2) 小石原では行政域の西側が、窯元の里の認識外である。
3) 一方、小鹿田では、重要文化的景観計画区域と窯元の里の認識との不一致がより大きく、池ノ鶴地区と西側の地区の、計画上との扱いに配慮が必要である。

＜参考文献＞

1)丸谷耕太、内山忠、山下三平(2013 年)「小石原焼の里における産地と職人の認識領域」，平成 25 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　研究成果報告書「北部九州の窯業に着目した文化的景観の形成と保全に関する研究」九州産業大学景観研究センター発行(平成 26 年 3 月)